

一ノ五、阿娑縛抄卷二百、諸寺略記上

出典 大日本仏教全書四十一

解説 阿娑縛抄は承澄（一二〇五〜一二八二年 天台宗の僧）が先学諸師の学説・口伝を蒐めて整理し完成したもので、仁治年間（一二四〇から四三年）起稿、建治元年（一二七五年）に一応完成。

この阿娑縛抄諸寺略記の項に伊呂波字類抄より詳しく弥勒像彫頭のいわれを記す。内容は殆ど字句に至るまで笠置寺縁起と同じである。

因みに伊呂波字類抄、阿娑縛抄そして後に述べる今昔物語と笠置寺縁起との内容比較を別ページに挿入しておく。

原文

笠置寺者。天武天皇御宇敷

天智天皇々子好文章。又好遊獵殺害猪鹿。是皇子乘飛雲之馬、備法駕、卒群臣、從山代国道崎、漸踏笠置山之峯。群師田獵馳散、各隨鹿章麋。皇子就鹿走馳行。駿馬控弓向東、到臨高岸。馬失足而倒。急拋弓矢、雖引手繩敢不留。至崢巖之透出、馬跪余足、四蹄聚一処。直下者下十丈許也。眼眩転而不矚谿底。驚擬還馬無足之所踏。欲進轡、如壁之聳立。神驟情騒、将与馬死。誓云、山神鬼魅、若扶吾命者、於此巖畔、奉刻弥勒尊像。立願。須臾如有冥助。馬促四足、指後而退。還竟、屈路地、脱所服之藺笠、置後日之指南。経一兩日、尋至笠置所。擬擘山腹像平觸其面、谿谷不貪響。誓念暗報天人助之。刻雕急成、黒雲覆山。宛如子夜暗。中有声、岩奔散、造像既畢。雲去霞晴。纔運歩之輩、植往生都卒之種也。偶礼尊顔之族、結龍華成道之果也。

読み下し文

笠置寺は天武天皇の御宇

天智天皇の皇子文章を好み、又遊獵を好みて猪鹿を殺害す。是の皇子、飛雲の馬に乗り、法駕（天子の車）を備へ、群臣を卒い、山代の国道崎従り、漸く笠置山の峯を踏む。群師田獵（狩り）に馳せ散じ、各鹿章（麋か）麋に隨う。皇子、鹿の走るに就き駿馬を馳行し、弓を控き東に向い、到りて高岸に臨む。馬足を失し倒る。急ぎ弓矢を抛げ、手繩を引くと雖も敢て留まらず。崢巖の透出するに至り、馬跪き足余り、四蹄を一処に聚む。直下は下十丈許なり。眼は眩転し谿底も矚えず。驚きて馬を還さんと擬るも足の踏む所もなし。轡を進めんと欲するも壁の聳立するが如し。神驟ぎ情騒ぎ、将に馬と死なんか。

誓いて云う、山神鬼魅、若し吾が命を扶くれれば此の巖畔に於いて弥勒尊像を刻み奉てまつると。

願を立て、須臾にして冥助有るが如し。馬四足を促して後を指して退く。還りて竟路地に届り、服する所の藺笠（藺草の茎で作った笠）を脱ぎ、後日の指南（手引き）に置く。

一兩日を経て、笠を置きたる所を尋ね至る。山腹を攀き像を其の面に觸るを擬るも、谿谷に響き食らず。

誓いの念に、暗に天人報いて之を助く。刻雕急に成りて黒雲山を覆う。宛も子夜（真夜中）の暗の如し。中に声有り、岩奔散し、造像、既に畢る。

雲去り霞晴る。纔に歩を運ぶの輩も都卒に往生するの種を植うる也。偶尊顔に礼するの族、龍華成道（注二）の果を結ぶ也。

注一、釈尊滅後五十六億七千万年後弥勒如来がこの世に出て龍華樹のもとで悟りを得て人々を救済する

という信仰